

吉野 源太郎

(株)日本経済新聞社論説委員

「きれいごと」であってはならない

沖縄・座間味村にある阿嘉島という離島の珊瑚礁は、ダイバーたちの間ではつとに有名だ。世界中の海を潜ったダイバーが、その美しさを素朴な言葉で讃える。

「この海は世界一だ」

座間味村の経済は全面的に観光収入に依存している。珊瑚礁は無二の観光資源である。

だが、この島の歴史は、観光開発を拒み続けた戦いの歴史でもある。リゾートホテルの建設、海浜レジャー計画、珊瑚礁ツアーの商品化・・・観光産業から持ち込まれる企画を村はことごとく拒否した。この島の珊瑚礁が本来の姿のまま生き残ったのは、そのかたくなな姿勢のおかげだった。

海洋生物学の専門家によると、沖縄本島の珊瑚礁は現在、ほぼ絶滅状態にある。そうなった主な原因は様々な開発事業だ。

阿嘉島の珊瑚礁は、その美しさのために今も残っているのではない。自然の美しさを愛でる人間の軽さ、それをあおって商売にする人々のいかがわしさを村人が見抜いたからこそ、珊瑚礁は残ったのだ。阿嘉島の観光経済は、そのことを知っている人々が支えている。見事なエコ・ツーリズムである。

それは私たちに、人間の暮らしと自然とのかかわりがどうあるべきかを厳しく問いかけている。日本の、そして世界中のあらゆる場所で環境破壊は今も進んでいる。

人類が経済活動とその上に成り立つ社会生活を営む限り、自然は守らなければ破壊されていく。

私たちは、何も手をほどこさない状態を「自然」本来の姿だと思いがちだが、それは今日、多くの場合、幻想でしかない。自然は自覚的に手をほどこして守らないと生き残らない。

今回、公表された「エコ・ツーリズム憲章」は、感傷的に自然の美しさをうたっている。確かに自然への感動はエコ・ツーリズムの第一歩である。しかし、その一歩をどこに向かって踏み出すかによって景色は輝きもし、暗くもなる。

これまで自然破壊を招いた多くの開発事業も周辺の自然を賛美する美しい言葉で飾られていた。それにひかれた人々が無邪気に感動しながら自然を踏みこじってきた事実を私たちは知っている。沖縄本島の珊瑚礁を殺した開発事業の

多くは珊瑚礁の美しさを売り物にしていたのだ。

自然を守る仕事は決してきれいごとではない。自然に感動する心を持たない人間はいないのに、なぜ私たちは愚かな自然破壊を繰り返してきたのか……。エコツーリズムは、国民一人ひとりが冷めた目でその答えを自らに問う学習の場でなければならないと思う。